

村山 司さん

(東海大学海洋学部教授)

イルカ研究の現在と未来

太古の昔から人の生活と深いかわりを持つてきた海洋生物イルカ。神話のエピソードになるほど、人間を驚かせてきたイルカの能力は、科学的にどこまで解明されているのか？ イルカ類の感覚と行動研究の最前線に立つ村山さんに話を聞いた。

イルカとの出会い

——村山先生の研究によって人間とイルカが相互にコミュニケーションがとれる可能性が示唆されました。イルカとの出会いから教えてください。

きっかけは、一本の映画でした。タイトルは、『イルカの日』。高校時代ですから、もう三十数年前になりますね。主人公は、イルカに人間の言葉を教えようとする海洋学者。イルカは主人公の家族やスタッフとも会話できるようになります。そのイルカが、ある財

団の陰謀で大統領暗殺に利用される。そんなストーリーでした。

イルカとの会話——。子ども心に強烈な衝撃を受けたのをいまでも鮮明に覚えています。

高校生だった私は、イルカに接するために水族館で働こうと考えました。でも、待てよと思った。水族館では、イルカに様々な芸を仕込みます。人間のサインを見たイルカが、回転してジャンプするとか、連続して高く飛ぶとか、ボールを持つてくるとか……。つまり人間側が一方的にイルカに指示を与えているわけです。私が興味を持ったのは、双方向のコミュニケーション

ョン、会話でした。

イルカというとなにか超能力のようなもので会話ができるかと思っている人もいます。でも、第三者に分からなければ、イルカの意志はその人の都合のいいようにいくらでも作り変えられてしまう可能性がある。それは本当の意味でのコミュニケーションとはいえない気がしました。

研究者の道に進んだのは、イルカとのコミュニケーション



●むらやま・つかさ 一九六〇年山形県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。博士(農学)。水産庁水産工学研究所研究員、日本学術振興会研究員などを経て、二〇〇〇年から東海大学海洋学部助教授。〇一六年から同教授。専門はイルカ類の感覚と行動、認知および魚類の繁殖。

ションを生物学的に突きつめたいと考えたからなんです。

とはいうものの、当時イルカなどの海獣類とのコミュニケーションを研究している大学なんてありませんでした。とりあえず水棲の生物について勉強しようとして東北大学で水産学を専攻しました。進学した東京大学大学院でも繁殖期の魚類のホルモンや行動を調べたりしました。

でも、そのままではイルカの研究ができないのは目に見えていた。意を決して研究室を変えて独学で研究しはじめたんです。

研究の進め方を教えてもらおうと、サカナの視覚の研究をしていた麻布大学の宗宮弘明先生(現・名古屋大学)や京都大学霊長類研究所でチンパンジーに言語を教えていた松沢哲郎先生に話を聞きに行きました。サカナやチンパンジーでの実験や研究をイルカにどう応用するか、考えたいです。

初めに行なったのは、水族館で飼育しているイルカの視力計測。イルカには物がどのように見えているか把握しなければ実験をしようにも先に進めないと思ったのです。その結果、ほとんどのイルカは〇・一くら